

エゼキエル 33 章 7-11 節

ローマの信徒への手紙 12 章 9-21 節

マタイによる福音書 18 章 15-20 節

台風一三号が過ぎ去りました。教会は、建物などに特に雨漏りや破損などはありませんでしたが、庭西側の樹木の少し大きめの枝が折れて落ちていました。風がかなり強かったようです。

さて、本日の旧約日課エゼキエル書は、南ユダ王国が崩壊する時期（紀元前6世紀）に書かれた預言書です。日課が含まれる33章1節から20節は、「見張りの務め」とある通り、預言者にイスラエル（南ユダ王国）に対して、見張りの務めをするように促しています。見張りの務めといっても、監視ではありません。イスラエルを導くための役割です。

そのことがわかる言葉が、聖書日課にあります。「彼らに言いなさい。私は生きている——主なる神の仰せ。私は悪しき者の死を決して喜ばない。むしろ、悪しき者がその道から立ち帰って生きることが喜ぶ。立ち帰れ、悪の道から立ち帰れ。イスラエルの家よ、あなたがたがどうして死んでよいだろうか」（エゼキエル 33:11）です。ここには、愛や慈しみという言葉はありませんが、主なる神様の愛を感じることが出来ます。主なる神様が預言者を通して、大切なイスラエルが立ち返るために、導こうとしているからです。そのことを、歴史的背景の中で読み解くとき、さらに重みが増します。

「人の子よ、私はあなたをイスラエルの家の見張りとした。あなたは私の口から言葉を聞き、私の警告を彼らに伝えなければならない」（エゼキエル 33:7）とあり通り、エゼキエル書は、7節から9節で預言者の責任を語りますが、その責任とは、イスラエルに主の言葉を語ることでありますが、単に言葉を伝えるだけでも、警告を語るではありません。主なる神様が自分の愛するイスラエルの状態をしっかりと見極め、悪人と評価し、しかし、立ち返ることを呼びかけている、そのことを伝えるということです。主なる神様は、「悪しき者の滅び」を語るのですが、「悪しき者が立ち返ること」を期待して語っており、単に、悪を滅ぼすことが主題ではないのです。そのことを伝えるのが見張りの務め、預言者の務めに他ならないのです。

「悪」という言葉が用いられていますが、旧約においてその意味は明確です。つまり、主なる神様から離れることです。律法違反という意味もありますが、律法違反とは、それは主なる神様から離れたこと具体例です。そして、律法は、単なる義務ではなく、主なる神様の愛に応える方法ですから、それを「守る」という行為の中には、もし主なる神様から離れてしまったとしても、「立ち返る」という側面もあるのです。律法によって、人間は何が悪であるかを知ることができるのですが、その律法によって、人間は主なる神様に立ち返ることもできるの

です。主なる神様が与えた、律法を守ることで、主なる神様の愛を感じ、主なる神様から離れていないに生きる、たとえ離れたとしても立ち返る方法を知り実践する、それを行う人間の代表がイスラエルなのです。

本日のエゼキエル書で、主なる神様のイスラエルへの愛が示されていると語りましたが、その愛は、単なるやさしさや馴れ合いの愛ではありません。主なる神様は、わが子であるイスラエルが南北に分裂し、北の王国が滅び、今や南の王国も滅びようとしているときにも、わが子にある悪なる部分をあえて指摘し、立ち返ることをもとめ、待ち続ける、厳しさと優しさを持った愛です。しかし、イスラエルは立ち返ることがなかったので、王国（南ユダ）はバビロニアによって滅びました。その出来事は、イスラエルから見たら、自分たちは見捨てられた、主なる神様を信じてもらえなかった、そのように思えたのかもしれませんが。しかし、彼らは、王国の滅亡という出来事からも、何かを学び、もう一度立ち返ることをもとめられていたのです。そこにも主なる神様の愛が示されています。

イエス様に起きた出来事は、イスラエルの王国的、集团的「滅び」という歴史的現象と同じではありませんが、十字架という「滅び」を含んでいる点は同じです。ただし、イエス様の場合は、イエス様が悪であるから滅んだものではありません。むしろ逆で、イエス様を逮捕し、十字架に掛け、その死を目撃したほうに悪がありました。不思議な力があるならば、その力で自分を救ってみろと思っていた人々の方に悪があったのです。そして、何も起こらなかったとき、イエス様の十字架の死は、敗北者の滅びに見えたのですが、そこにそれを目撃している人々にとっての立ち返るべき点があったのでした。イエス様がなぜ十字架の死を受け入れたのか、そこにおいて主なる神様が何を示されているのかと問いかけられるからです。

イエス様を十字架の死に至らしめた人々が、勝利を確信したイエス様の「死」という出来事は、終わりではありませんでした。「死」は、勝利のしるしではなかったのです。復活という永遠の命へとつながっているからです。現代社会においても、「死」は大きな恐怖です。そして、それゆえに他者を傷つけることも生まれます。そのような世界からどのように抜け出すのか、立ち返るのか、それはイエス様の十字架の死と復活です。そこにイスラエルを超えて、すべての人が主なる神様の愛に立ち返ることのできる点が存在するのです。

今年は9月23日に、コロナ禍のために中止していた逝去者記念聖餐式を数年ぶりに持ちます。この10年以内に逝去された方々を覚えて、聖餐の恵みに与ります。教会が逝去記念の礼拝を持つのは、単に故人のことを思い出すためだけではありません。その方が今もイエス様の十字架と復活への信仰を通して、天においてまことの命を歩まれていることを確認するときです。その確認のしるしの一つが、地上にいるわたしたちにとって、聖餐の恵みです。天地創造の初めからおられ、地上に生き、そして、今も天におられるイエス様が中心におられる食卓であるからです。本日も礼拝において、その恵みに与ります。そのことを改めて感謝したいと思います。